

プレイリーダーのいる子どもの遊び場に関する研究 (第1報)

「雑創の森プレイスクール」(京都府田辺町)における調査事例

○梶木 典子* 瀬渡 章子** 平井 由紀*³(*奈良女大・院、**奈良女大、*³関西セキスイ工業株)

【目的】 遊び場の減少、少子化、子どもの生活時間におけるゆとりの減少などにより子どもの自然発生的な遊び・遊び場が失われつつある現状では、大人が積極的に関わり子どもの遊び・遊び場を用意することも必要となってくる。わが国ではまだ例の少ないプレイリーダーのいる遊び場について利用実態・利用者意識を調査し、このような遊び場形態が、今後、都市部の住環境計画にどのように組み込むことができるのかを検討する。

【方法】 1976年に京都府綴喜郡田辺町において(財)プレイスクール協会により開設された会員制「雑創の森プレイスクール」を調査対象とした。このプレイスクールでは、平日午後は幼稚園児対象に、土曜日午後は小学生対象に、冒険遊びや物づくりなどの活動を行っている。今回は小学生の活動について、会員小学生の活動観察調査・ヒアリング調査、その母親への質問紙調査およびプレイリーダーへのヒアリング調査を行った。調査期間は1996年10月から11月。小学生のヒアリング調査は直接面談方式で行い、回答者数59人、回答率46%であった。母親への質問紙調査は郵送調査で行い、回収数69票、回収率73%であった。

【結果】 プレイスクールの活動は非常に楽しいと答えた子どもが多く、子ども自身が学校や家庭の自分とは違う自分を発見し、自分の居場所を見つけているようであった。立地環境が自然に恵まれている本調査地では、その自然環境が子ども・親のどちらにも非常に高く評価されていた。また、物づくりや、野外での冒険遊び、異年齢集団で遊ぶなど日常の遊びではできないような遊びについての評価も高く、このような遊びを可能にするプレイリーダーの存在は重要であると認識されていた。